

国際教育寮における BEVI の活用と その意義

The Use of BEVI in International Dormitories and Its Significance

吉 田 千 春

要 旨

本研究では、信念や価値観などの心理特性を客観的に測定できる BEVI (Beliefs, Events, and Values Inventory) を国際教育寮で活用した事例を紹介し、国際教育寮における客観的効果測定の活用方法と意義を明らかにした。BEVI を 2 回実施し、その結果について「Aggregate Profile (平均プロファイル)」、 「Decile Profile (デシルプロファイル)」、 「T1T2 レポート」などを作成し、全体の特徴や傾向、グループ内の分布、半年間の変化などを分析した。その結果、国際教育寮における BEVI の活用に関して「自己・他者理解を深める」、「各グループの特徴や多様性を可視化する」、「客観的効果を測定する」、「研修やプログラムの作成・評価・改善に活かす」という 4 つの意義があることが明らかになった。

キーワード

国際教育寮, BEVI, 客観的評価

1. 研究の背景と目的

現在、社会の変化に伴い、大学生に求められる能力として、専門能力だけでなく、学士力、社会人基礎力といった汎用的な能力が求められるようになってきた。授業においては教授者中心から学習者中心のパラダイムへの転換が要請され、学生の主体性を育む教育が導入されている。これに

より、教室の空間構成や使い方が変わるとともに、大学教育の場が教室の外へも拡大された。同時に、グローバル人材の育成及び留学生受け入れの拡大に伴い、学内の国際化が喫緊の課題となっている。

これらの背景から、日本では、外国人留学生とともに生活し、国内でグローバル人材を育成する場としての国際寮を新設する大学が増えている(牧田2013)。さらに、文部科学省による2014年度の「スーパーグローバル大学創成支援事業」の構想調査に「混住型学生宿舎の有無」を示す欄が設けられたことにより、単なる居住施設としての寮から留学生と国内学生が混住する国際教育寮を運営する大学が増加した。このような変化に伴い、交流を促進するための建物や設備の整備など、寮の物理的な側面は大きく変化した(吉田・田中・飯田2016など)。具体的には、個室からシェアやユニットタイプへの部屋の変更、多様な目的に合わせた交流スペースの設置などである。一方、入寮者の教育的な側面の整備は遅れている。現在の国際教育寮の多くは、国内学生と留学生を同じ空間に住ませ、レジデントアシスタント(以下、RA)を配置し、異文化接触の機会を提供してはいるが、そこには具体的な教育目標の設定や学習のデザインなど、学びの質を保証する基盤があるとは言えない。その理由の一つとして、日本における国際教育寮の多くが、持ち回りの職員が担当しており、専門的な教職員の関わりが少ない点が挙げられる。一方、アメリカでは、教員主導でカリキュラムと寮教育を関連づける取組みが行われるなど、リビング・ラーニング・コミュニティが発展しており、2000年以降は寮教育においても、学習成果を基盤としたアセスメントの取組みが積極的に行われている(安部2019)。また、アジアのトップ大学では、2010年以降、教員が寮に住みながら運営を行うレジデンシャル・カレッジ(Residential college)が増加している(吉田・田中・横田2017)。日本においても、寮のプログラムの開発、客観的な効果測定、運営を担うスタッフの育成などが急務である。

そこで本研究では、信念や価値観などの心理特性を客観的に測定できる BEVI (Beliefs, Events, and Values Inventory) を国際教育寮で活用した事例を紹介し、国際教育寮における客観的効果測定の活用方法と意義を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

日本では前述の通り、グローバル人材育成の観点から多様性を重視した国際教育寮が増加しているが、国内の寮を対象とした研究は、教育寮自体が少ないこともあり、研究も少ない。国際寮全般の先行研究を概観すると、大きく3つの観点からの研究に大別できる。第一に、寮の教育的機能や寮で育まれる能力に関する研究（中村・伊藤・今村他 2006; 正宗 2015; 吉田 2016; 山川 2017 など）、第二に、寮における日本人学生と留学生の人間関係構築に着目した研究（横田・田中 1992; 出口・八島 2008; 山川 2013 など）、第三に、寮の環境作りに関して建築学的な観点から行った研究（山下・新留・飯田他 2014 など）である。これらの研究により、寮が留学生と国内学生の両者にとって学び・成長する場であることが明らかになっている。しかし、従来の研究では、アンケートやインタビューの手法のみが使用されており、寮生の学びと成長について、客観的データに基づいた効果の測定や、エビデンスに基づいたプログラムのデザインに関する研究は管見の限り見当たらない。

国際教育寮と同様に大学において国際教育やグローバル人材の育成を目的として行われているプログラムとして留学が挙げられる。近年、留学制度の充実を図る大学が増えている中で、多様な留学（語学、異文化学習プログラム）の増加に伴い、留学生の学修成果や個々のプログラムに対する客観的な分析・検証・評価の必要性が高まっている（大学時報 2018: 72）。さらに新型コロナウイルスの影響で、2020年以降は自国で海外の大学の単位を履修するオンラインを活用した留学が増加しており（中野・石倉・近藤 2020:

27), 今まで以上に留学のインパクトや効果測定の重要性が増している。

留学の効果測定に関しては、アメリカではBEVIをはじめ、IDI (Intercultural Development Inventory) や GPI (Global Perspectives Inventory) など、客観的テストが複数開発されており、海外での留学プログラムのインパクトは客観的テストに基づく研究が中心になっている。一方、日本では留学後に実施された参加者本人の自己評価に基づく研究が中心であり、本人の申告による事後の自己評価に頼っているのが現状である (西谷 2020)。このような批判を受け、事後評価のみの分析ではなく、BEVIやIDIを使用して海外留学の渡航前と渡航後の変化を測定する研究が増えている (永井 2018; 西谷 2020 など)。また、オンライン留学を対象とし、BEVIで留学の効果測定を行った研究 (清藤・橋本 2020 など)、ICTを用いてオンラインで海外の大学との交流を行う教育手法である COIL (Collaborative Online International Learning) などにも BEVI が用いられており (ウィルソン・岩野 2021; 植村・和田他 2021 など)、BEVI の有効性が実証されている。

西谷 (2020) は、留学の効果の客観的測定・評価・分析及びプログラムの質保証等の必要性について、「参加学生のアウトカム等の客観的測定の必要性」、「データにより証明された、効果を有する短期留学プログラムの実施の必要性」、「複数の短期留学プログラム間の比較また従来型の長期プログラムとの比較・評価・改善」、「受入プログラム・混合プログラムの評価・改善」、「客観的データに基づく参加者、保護者、大学本部、財政当局への説明の必要性」の 5 つの観点を挙げている。

国際寮は「寮内留学」とも言われているが (リクルートカレッジメント 2013)、周知の通り、日本人学生と留学生をともに住ませただけで学びが自然と育まれるわけではない。また、生活の場でもある寮生活で培われる学び・成長は知識や異文化に関するスキルの一部のみを養うものではなく、全人格的な学びである。大学が国際教育寮として寮を運営するならば、留学

と同様に効果の客観的測定や寮内における活動及びプログラムの改善などが不可欠である。よって、本研究では BEVI を用いて、国際教育寮の寮生を対象に客観的測定を行った。

3. 研究の方法

3.1 BEVI の概要¹⁾

BEVI はアメリカの研究者グループが開発し、心理学、心理統計学、臨床心理学などに基礎を置くもので、異文化間能力を含む自己 (Self) 全体を客観的に測定できるテスト及び分析ツールである。数十年かけて培われた Equilintegration 理論また EI セルフに基づく BEVI は、人の心理構造の中核部分 (欲求・自己) から、批判的思考、レジリエンス、異文化受容性まで幅広くかつ包括的な測定を行うことが可能である。今回使用した BEVI は 2016 年に完成した日本語版の BEVI-j (バージョン 2) である。

BEVI テストは全てオンラインで行われ、28 項目の背景情報に関する質問項目 (年齢、性別、国籍、訪問回数など) と 185 項目の心理特性に関する質問項目からなる。185 項目の質問項目は、4 つの選択肢「強くそう思う」、「そう思う」、「そうは思わない」、「全くそうは思わない」から最もよく表している気持ちを選択する形式であり、さらに 3 項目の経験に対する内省的な質問項目で構成されている。これらの質問項目は、コンピテンシーに関する表現また文化的バイアスを排除するように配慮されている。なお、回答に必要な時間は約 30 分程度である。回答結果は自動的に統計的な処理がされ、管理者はオンライン上で分析結果を確認することができる。

また、データを分析する際に重要な点として、データの有効性が挙げられる。BEVI は最初に「適合性」(Congruency) と「一貫性」(Consistency) が示され、その割合が 6 割以上であれば分析を行うことが可能であると言われている。BEVI ではこの 2 つ以外にも、複数の視点からデータの信頼性

を確認する基準が設けられており、基準以下のデータは分析不可として処理される。よって、信頼できるデータのみが分析対象となる。

3.2 BEVI の尺度

表1はBEVIの17の尺度と7つの領域を示したものである²⁾。

留学をはじめとする国際教育及びグローバルコンピテンシーに関係のある尺度としては、「15. Sociocultural Openness」と「17. Global Resonance」が挙げられる。しかし、BEVIの分析においては、特定の尺度のみに焦点をあてるのではなく、全体として捉えるべきであると言われている(Wandschneider, E. et al. 2015)。そのため、本研究では、尺度の一部を切り取

表1 BEVIの尺度と領域

| 尺 度 | 領 域 |
|--|--|
| 1. 人生における負の出来事 Negative Life Events | I. 形成的因 Formative Variables |
| 2. 欲求の抑圧 Needs Closure 3. 欲求の充足 Needs Fulfillment 4. アイデンティティの拡散 Identity Diffusion | II. 中核的欲求の充足 Fulfillment of Core Needs |
| 5. 基本的な開放性 Basic Openness 6. 自己に対する確信 Self Certitude | III. 不均衡の許容 Tolerance of Disequilibrium |
| 7. 決定論・必然論的性向 Basic Determinism 8. 社会・情動の理解 Socioemotional Convergence | IV. 批判的思考 Critical Thinking |
| 9. 身体への共鳴 Physical Resonance 10. 感情の調整 Emotional Attunement 11. 自己認識 Self Awareness 12. 意味の探求 Meaning Quest | V. 自己の理解・アクセス Self Access |
| 13. 宗教的伝統主義 Religious Traditionalism 14. ジェンダー伝統主義 Gender Traditionalism 15. 社会文化的オープン性 Sociocultural Openness | VI. 他者の理解・アクセス Other Access |
| 16. 環境との共鳴 Ecological Resonance 17. 世界との共鳴 Global Resonance | VII. 世界の理解・アクセス Global Access |

出所) 西谷 (2021)「BEVIを用いた留学・学習効果の客観的測定—教育プログラムの質保証・PDCA・教育的介入—」SIIEJ 発表資料

るのではなく、全体としての分析を行う。

3.3 BEVI を実施した国際教育寮の概要

今回 BEVI を実施した寮は、関東圏にある私立大学の国際教育寮（以下、A寮）である。居室は個室と共同のミニキッチン及びシャワーブースがあるユニット形式で、各フロアに共有スペースが設けられている。また、寮生全員が使用できる共同のキッチン、ラウンジ、ホールなどが設置されている。入寮時に選抜審査があり、各部屋に1名のユニットリーダー（以下、UL）と約20名のRAが配置されている。ULは主にユニットのサポートを行い、RAは寮全体のサポート、運営及び研修の企画実施などを行う役割があり、RAの方が高い選抜基準が設けられている。また、ULとRAには、3月と9月に数日間の研修が実施されている。なお、通常は1年間の居住が可能であるが、これらの役職に就く場合のみ、2年目以降の居住が認められている。通常は定員の3分の1を交換留学生の居住枠として設けているが、調査時は、新型コロナウイルスの影響で留学生の居住率が10～20%であった。また、新型コロナウイルスの拡大が始まった2020年度の前期は教育寮としての機能が停止となり、帰宅した学生もいたため、後期（9月）からRA・ULの研修が本格的に行われ、寮内における活動が実質的に開始された。

3.4 国際教育寮における BEVI の実施方法

本研究における BEVI の対象者は、A寮の寮生全員である。但し、受検は任意とした。本来は4月の入寮時に調査を行う予定であったが、2020年度は前述の通り、9月から活動が開始されたため、開始時の9月に1回目、多くの学生が退寮する1月に2回目の BEVI を実施した。2回の実施概要は表2の通りである。

表2 BEVIの実施概要

| 実施期間 | 実施回数 | 受検率 | 受検者数 | 全寮生の人数 |
|---------|------|-----|------|--------|
| 2020年9月 | 1回目 | 60% | 47名 | 78名 |
| 2021年1月 | 2回目 | 30% | 28名 | 91名 |

次に実施方法である。まず、寮の全体会議において口頭並びに文書でBEVIの目的、注意点及び実施方法などを説明し、その後3週間をBEVIの受検期間とした。BEVIに関する説明は寮生のLMS (Learning Management System) やLINEなどに記載し、いつでも確認できるようにした。

また、BEVIは、最初にテストに関する説明及び同意書を読み、同意した場合のみ受けることが可能である。受けた直後に、同意に基づき個人レポートが作成され、結果のフィードバックを得ることができる。寮生にはBEVIを受ける意義として、「自己理解と他者理解の促進のため」、「グループレポートの結果を寮のプログラムの改善に活かすため」と説明した。なお、個人レポートは、本人以外はアクセスすることができない。

3.5 分析方法

本研究では、役割また属性の異なる各グループの特徴と変化を知るため、寮生、UL、RAの3つのグループに分け、以下の手順で分析を行った。

まず、グループごとの全体の傾向を知るために「Aggregate Profile」を作成した。「Aggregate Profile」は、50を平均とし、各尺度のスコアが100の棒グラフで表示される。平均値を基準として分析することで、グループ全体の特徴を知ることができる。次に、グループ内の差異また分布を知るために「Decile Profile」を作成した。「Decile Profile」ではスコアが10等分され、1～10の各Decileに何%の学生が該当するのかが示される。この分析により、「Aggregate Profile」の平均値からは読み取ることのできないグ

ループ内の分布を分析することができる。また、必要に応じて「Aggregate Profile Contrast」を作成した。この「Aggregate Profile Contrast」はフルスケール・スコアという複合スコア³⁾を使用しており、グローバル・アイデンティティの構成要素を、留学プログラムなどにおいて変化させることができるのかを明らかにするために用いられてきた。相関行列と因子分析に基づき抽出されたスコアを上位群 (Highest)、中位群 (Middle)、下位群 (Lowest) の3つのグループに分けて分析を行うことで、グループがどのように異なり、どのように共通しているかを知ることができる。さらに、2回目の調査結果を分析する際に、1回目と2回目の結果を比較する「T1 T2 レポート」を作成した。これにより、一定期間の変化を分析することができる。

続いて、BEVIで作成したレポートごとに、結果を詳述する。

4. 結 果

4.1 1回目(9月)の「Aggregate Profile」の結果

図1は寮生、UL、RAのグループごとに作成した1回目の「Aggregate Profile」である。

まず、寮生のグループである。このグループは書類審査で選ばれ、高校を卒業したばかりの1年生が主である。グループの特徴を把握するため、BEVIの17の尺度のうち、60を超えたスコアに着目する。この寮生グループで60を超えて高かったのは「11. Self Awareness (76)」、「9. Physical Resonance (74)」、「17. Global Resonance (66)」、「15. Sociocultural Openness (64)」の4つである。「Self Awareness」と「Physical Resonance」は自己の理解に関わるもので、この尺度が高い場合は内省的で感情の受容が高く、自己認識が高い学生が多い傾向にあると言える。また、「Global Resonance」は世界やグローバルな社会への関与を示す尺度であり、「Sociocultural Openness」

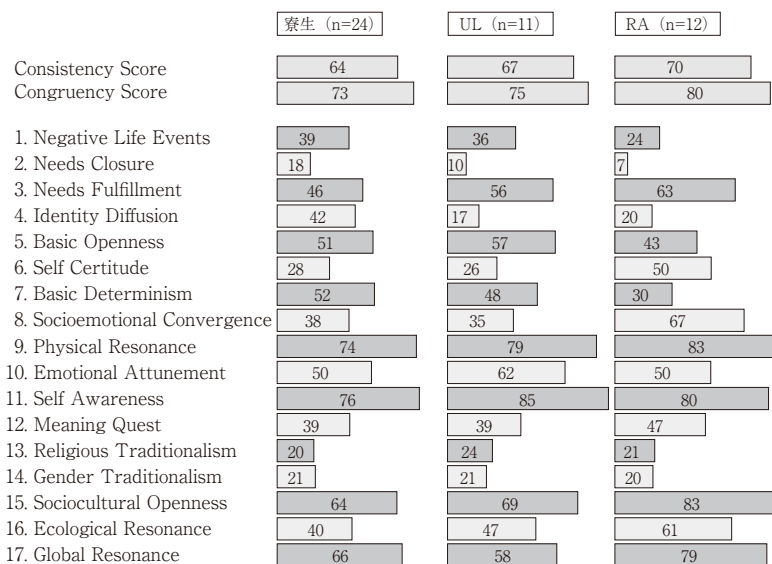


図1 A寮の「Aggregate Profile (2020年9月1回目)」

は異なる文化、環境、国際関係、政治分野における様々な行動、政策及び実践についてオープンであることを示す尺度である。留学や国際教育に関わる分野においては、この2つの尺度が最も関わりが深いとされており、国際教育寮ではこれらの尺度が高いことが望まれる。

次に、ULのグループである。ULはユニット内の取りまとめやサポートを行う役割を担い、書類審査と面接審査で選ばれた学生である。ULのグループの結果は前述した寮生のグループと非常に似た傾向を示しており60を超えた尺度は「11. Self Awareness (85)」、「9. Physical Resonance (79)」、「15. Sociocultural Openness (69)」の3つである。一方「17. Global Resonance (58)」はやや低く、多様な言語・文化的グループの人との関わりを望む学生がやや少ない傾向にあると言える。

続いて、RAのグループである。RAは主体的に寮の活動に関わり、寮の

運営や寮生のサポートを行う役割を担い、書類審査と面接審査で選ばれた学生である。RA のグループは7つの尺度で60を超えていた。中でも「15. Sociocultural Openness (83)」、 「9. Physical Resonance (83)」、 「11. Self Awareness (80)」の3つの尺度では80を超えており、社会に関する様々な分野における幅広い行動、政策、実践などに関して非常にオープンであり、内省的で自己認識が高い学生が多い傾向にあると言える。さらに60以上の尺度は「17. Global Resonance (79)」、 「8. Socioemotional Convergence (67)」、 「3. Needs Fulfillment (63)」、 「16. Ecological Resonance (61)」であった。このことから、世界に対する関心が高く、他者と異なる価値観を受容することができ、環境への意識が高いなどの傾向があると言える。なお、「8. Socioemotional Convergence (67)」と「7. Basic Determinism (30)」は BEVI においてはクリティカルシンキングに関する領域で、多様性の高い環境においては「Basic Determinism」は低い方が良いとされている。なぜなら、この尺度が高い場合は白黒はっきりつけたがる、二項対立やステレオタイプで判断する傾向があるとされているからである。一方、「Socioemotional Convergence」が高い場合は、自己、他者、より広い世界を認識し、オープンであることを示している。多文化環境の寮では、全く異なる考えが両方正しいこともあり、柔軟な見方や対応が求められるため、「Basic Determinism」は低く、「Socioemotional Convergence」が高い方が望ましいと考えられる。「Basic Determinism」については寮生が52、ULが48であるが、RAは30と低い結果が出ており、柔軟に対応ができるRAが多いことが分かる。また、3つのグループとも、「13. Religious Traditionalism」と「14. Gender Traditionalism」は20台と低く、宗教とジェンダーに関しては、伝統的な価値観に縛られないリベラルな価値観を持った学生が多いと言える。

以上の結果から、入寮時の段階で、国際教育寮の寮生に求められるグローバルな関心の高さや社会に対するオープン性、柔軟な思考を持ち合わせ

た学生が全体的に多い傾向にあることが分かった。また、RAは国際教育寮のリーダーとしての素質を既に持ち合わせている学生が多い一方、ULは寮生とほとんど変わらず、育成が必要であることが窺われる。

4.2 他大学との比較

上記の通り、A寮の3つのグループの比較からは、国際教育寮に求められる学生が多い傾向が見られた。では、国内外の大学1年生の結果⁴⁾と比較した場合は、どのような特徴が見られるだろうか。西谷(2020)によると、国内外の大学を対象としたBEVIの研究から、各グループはそれぞれ特徴を有しているが、同年齢の日本人学生グループの場合、その特徴は相互に非常に似通っている場合がしばしば見られる一方、他国からの大学生グループと比較した場合、日本人学生のグループの特徴が明確になるとのことである。国内外の大学の結果と比較することで、A寮の特徴をより明確化する。

4.2.1 国内の大学1年生との比較

図2は広島大学(国立大学)の1年生を対象に、2020年に行われたBEVIの結果(1421名)である。広島大学は7割以上が広島県外から来ており、多様な学生の結果を示している。

A寮の各グループの結果と広島大学の1年生のグラフを比較すると、A寮の3つのグループの方が全体的にスコアは高いが、西谷(2020)の指摘通り、概ね同じ傾向を示している。次に、広島大学の結果とA寮の中で1年生が最も多い寮生グループとを比較すると、「17. Global Resonance」のスコアが最も大きく異なっており、A寮の寮生グループの方が15ポイント高かった。また、同様に「8. Socioemotional Convergence」が12ポイント、「15. Sociocultural Openness」と「12. Meaning Quest」(人生の意味を深く考え、主体性の一部を含む尺度)が11ポイント高かった。A寮の中では全体的な

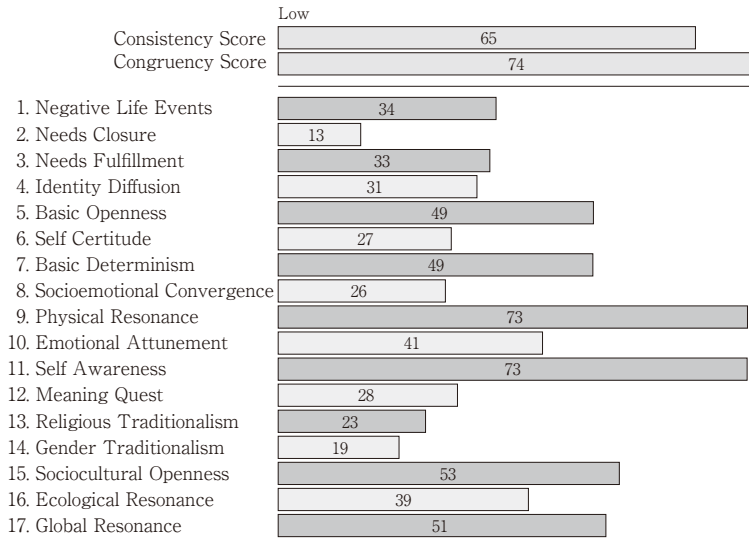


図2 国内の広島大学1年生の「Aggregate Profile (2020年)」

スコアが最も低かった寮生グループであったが、学部や興味・関心に偏りのない広島大学の1年生と比較すると、国際教育や多文化教育に関連の深い尺度が高い傾向にあることが分かった。

4.2.2 海外の大学1年生との比較

続いてアメリカの大学との比較である。図3はアメリカ中西部でトップレベルの大規模州立大学の1年生を対象に、2020年に実施されたBEVIテストの結果(457名)である。

アメリカの大学とA寮の結果を比較すると、最も似た傾向が見られたのはA寮のRAグループである。この2つのグループに共通した特徴として、「7. Basic Determinism」(白黒はっきりつけたがるなど)が低く、「8. Socioemotional Convergence」(社会・情動への理解)のスコアが高いことが挙げられる。「Socioemotional Convergence」は一般的には学年と比例し、社会や他者に

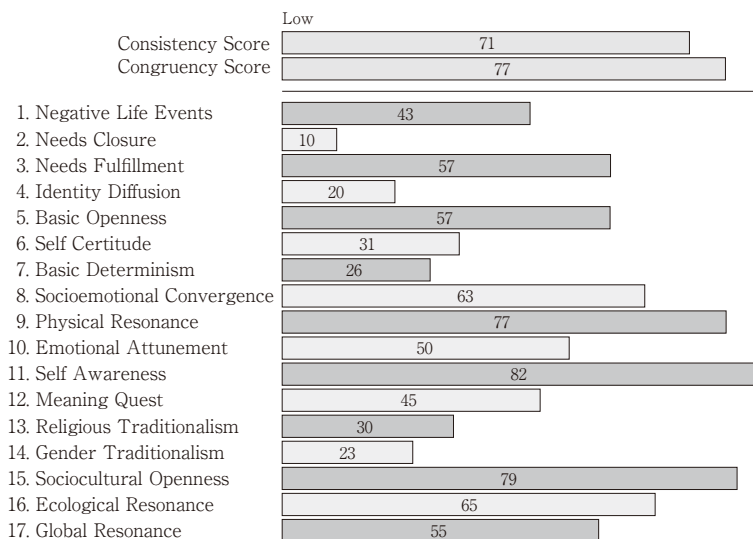


図3 アメリカの大学1年生の「Aggregate Profile (2020年)」

関心を向けられるようになると高くなると言われている。A寮のRAグループは2～3年生が中心であるが、アメリカの大学生は1年生からこのスコアが高く、自己、他者、より広い世界を認識し、オープンであることが分かる。実際、A寮の寮生、ULグループ及び国内の広島大学の1年生は逆の結果、つまり「Basic Determinism」が高く、「Socioemotional Convergence」が低い結果が出ており、国際教育寮のプログラムでは、「Basic Determinism」が低く、「Socioemotional Convergence」が高くなるような意図的な介入を行う必要があると言える。

一方、「17. Global Resonance」のスコアに関しては、アメリカの大学生は55と平均的であるが、RAグループは79と圧倒的に高く、これに関しては、RAグループがグローバルな関与について意識が高いことが示された。

以上の通り、国内外の大学と比較をすることで、A寮のグループごとの

特徴が明らかになった。

4.3 1 回目（9 月）の「Decile Profile」の結果

次に、「Aggregate Profile」からは見えない差異と分布を明示するため、「Decile Profile」の結果を示す。ここでは、紙幅の関係上、特徴が見られた 2 つの尺度に絞って説明する。

第一に「17. Global Resonance」(図 4) の結果である。どのグループも、1～3 の低い Decile と 8～10 の高い Decile に分散する傾向が見られるが、RA は最も明確な特徴が見られた。RA のグラフを見ると、Decile 9 に 45%、Decile 10 に 27% が位置しており、70% 以上の学生が非常に強くグローバル社会への関与を望んでいる。一方で、Decile 3 に位置する学生も 18% おり、数名はグローバルに関する関心が明らかに低いことが分かる。

第二に「Basic Determinism」の結果(図 5)である。グラフを見ると、寮生及び UL は比較的なだらかに分散しているが、RA は 72% が低い Decile (1～3) に位置している。一方、27% が高い Decile (9～10) に位置しており、両極端であることが分かる。この場合、高い Decile の位置にいる学生はステレオタイプ的な見方が強い傾向や物事の是非をはっきりさせたがる傾向があるなど、多様な価値観を持った場で柔軟に対応できない可能性が

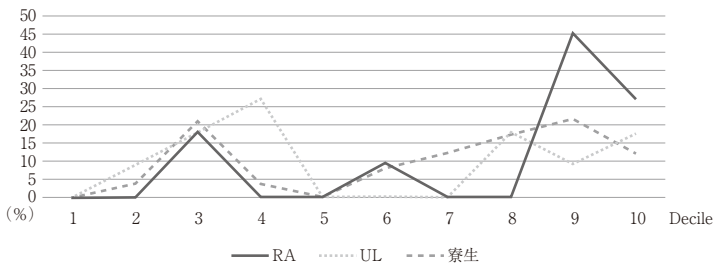


図 4 グループごとの「Global Resonance」の分布（「Decile Profile」）

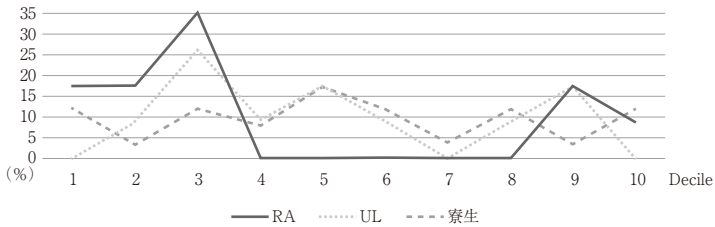


図5 グループごとの「Basic Determinism」の分布（「Decile Profile」）

あると言える。

このように、「Decile Profile」で分布を見ることで、個々のグループの多様性と特徴が明らかになった。入寮時に各グループの細かい分布を知ることができれば、起こり得る問題の予測や予防につなげることができる。また、事前に準備していたプログラムの適切性を判断することができ、必要に応じて柔軟に改善することができる。

4.4 1回目（T1）と2回目（T2）の変化

最後に1回目と2回目の変化を見るため、「T1T2レポート」の結果を示す。今回、2回目のBEVIの受検者が約30%と少なかったため、3つのグループを統合し、A寮全体の傾向として分析を行った。

4.4.1 「T1T2レポート」の結果（「Aggregate Profile」）

図6は2回とも受検した17名の1回目と2回目の変化を示した「Aggregate Profile」である。BEVIでは、T1とT2の差が5ポイント以上出ると有意性があるとされている。本研究では「1. Negative Life Events」（8ポイント減）、「3. Needs Fulfillment」（8ポイント減）、「4. Identity Diffusion」（15ポイント増）、「12. Meaning Quest」（7ポイント減）の4つの尺度において変化があったことが示された。

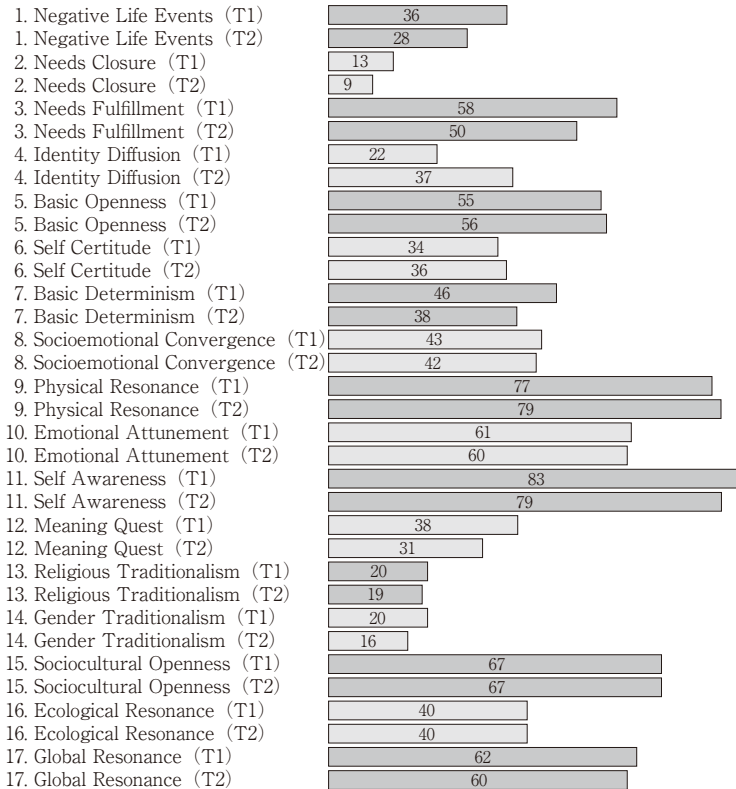


図6 T1 (9月) T2 (1月) の変化

4.4.2 「T1 T2 レポート」の結果 (「Profile Contrast」)

次に、「Profile Contrast」を使用して、より詳細に変化について分析したところ、スコアが低かった7名が下位層 (Lowest)、中間だった8名が中位層 (Middle)、高かった2名が高位層 (Highest) に分けられた。ここでは、最も大きな変化が見られた「4. Identity Diffusion」と国際教育寮と関係の深い尺度 (「15. Sociocultural Openness」, 「17. Global Resonance」) に着目し、説明する。

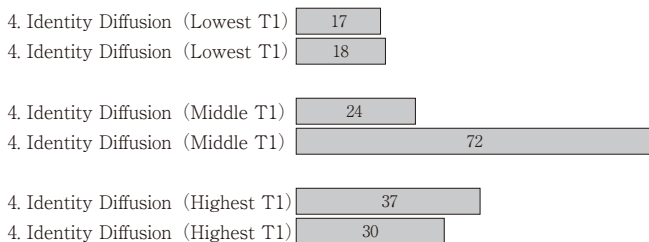


図7 「4. Identity Diffusion」の変化

まず、「Identity Diffusion」の変化を示した図7を見ると、中位層が24から72ポイントに上がり、アイデンティティが拡散する方向に大きく変化したことが分かる。Wandschneider, E. et al. (2015) は「Identity Diffusion」が低いスコアから高いスコアに変化することに関して、それまで慣れ親しんできた文脈や文化とは大きく異なるものに触れることによって、それまで信じていたことや評価していたこととのバランスをとることが関係しているのではないかという見解を示している。本研究では特定はできないが、今回対象とした寮は高校を卒業したばかりの大学1年生の居住者が最も多く、1人暮らしや寮に住むことが初めての学生も多い。そのような中で、留学生はもちろん、日本人学生同士でも多様な人と共同生活をする中で、今までの信念や価値観が揺さぶられることは大いに考えられる。また、新型コロナウイルスの影響で、期待していた寮生活が送れない葛藤や様々な不安を抱えていた可能性もある。今回の BEVI の結果のみからは、原因は特定できないが、国際寮ではこのような変化は起こりやすいと考えられるため、インタビューやアンケートなどでより詳しく分析する必要がある。

次に図8である。グローバルコンピテンシーに関連のある「Sociocultural Openness」と「Global Resonance」に着目すると、2つの尺度とも中位層は10ポイント以上下がっていた。反対に、上位層は両方の尺度とも上がっており、特に「Global Resonance」に関しては、21ポイント高くなっていた。

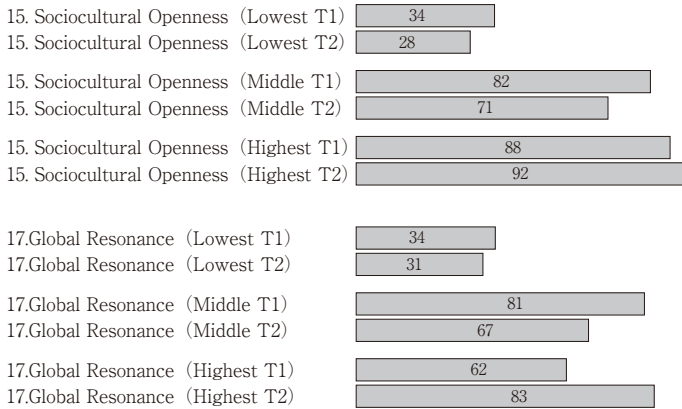


図8 「Sociocultural Openness」と「Global Resonance」の変化

国際教育寮では、通常はこの2つの尺度が伸びることが期待されるが、今回、中位層において反対の結果が見られた。但し、今回の結果は人数が少なく、寮全体の結果とは言えないため、寮生へのヒアリングを行った。それによると、新型コロナウイルスの影響で留学生が少なく、寮内では留学生との交流を積極的に行う学生と全く関わらない学生で二極化していたとのことである。また、留学生が少ないことにより、異文化に対するモチベーションが非常に下がった寮生も多かったようである。そのため、積極的に留学生との交流を行った学生はスコアが伸びたが、それ以外の学生は期待と異なり、意識が低くなったことが考えられる。

国際教育寮は留学生との共同生活が前提であり、2020年度は新型コロナウイルスの影響で留学生が少なく、寮内の交流の制限が設けられ、密になるイベントの中止を余儀なくされた。今回の結果から、国際教育寮として機能をしない場合は、国際寮で求められる「Sociocultural Openness」及び「Global Resonance」が低くなることが示された。下位層はもともと低いため、変化が少なかったと考えられるが、今後も寮の中では中位層の学生が

最も多く占めると予想される。中位層は、環境によっては、よりスコアが伸びた可能性が高く、改めて寮における交流の重要性及び意図的な介入やデザインの必要性を認識した。

4.4.3 「T1 T2 レポート」の結果（男女別）

さらにA寮は公共スペース以外男性と女性で居住スペースが完全に分けられているため、男女別（男性5名、女性11名）の違いを分析した結果を示す。ここでは、10ポイント以上の変化が見られたスコアについて述べる。今回、次の4つの尺度において、男性のみに変化が見られた（図9）。「5. Basic Openness」は根本的な思考、感情、欲求に対してオープンかつ受容的であるという尺度であり、「10. Emotional Attunement」は感情の調整に関する尺度であるが、それぞれ15ポイントと18ポイントの減少が見られた。これらの尺度は女性と比べると元のスコアが相対的に低い尺度であり、女性

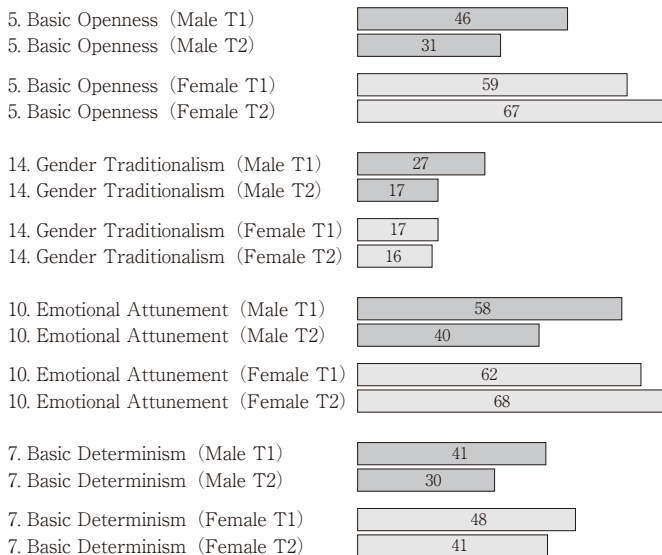


図9 男女別の変化

が6～8ポイント高くなったこともあり、男女で大きく差が開く結果となった。また、「7. Basic Determinism」は11ポイント減、「14. Gender Traditionalism」においても10ポイント減ったが、これは二項対立的な考え方及び伝統的なジェンダー主義の傾向が減少したことを示しており、国際教育寮の学びという観点から考えると、肯定的な変化と言える。

このように男女で異なる結果が見られたため、寮内のプログラムにおいても、居住スペースによる違いを考慮して検討する必要があることが分かった。

5. 国際教育寮において BEVI を活用する意義

以上の通り、2020年度の BEVI の結果から、BEVI の活用について様々な示唆が得られた。次に、国際教育寮において BEVI を活用する意義について考察する。

5.1 自己・他者理解を深める

多様な信念や価値観を持った学生が集まる国際寮で相互理解を深めるには、自己理解並びに他者理解を深めることが重要である。BEVI は受けた直後に個人レポートが返却され、すぐにフィードバックを得ることができる。この個人レポートには、自分が何を信じ大切にしているのか、何故そのように信じているのか、世界にはどのような考え方の人がいるのか、その中で自分はどのように考える傾向があるのかなどが総合的に書かれており、個人レポートを読むことで自己・他者についての理解を深めることにつながる。

また、他者理解のためには、グループの傾向を知ることも重要である。「Aggregate Profile」または「Decile Profile」などのグループの特徴を学生に開示し、説明をすることで、同じ寮内に住む学生が多様な考えや価値観

を持っていることを明示的に示すことができる。これは、特にRAのようにチームで活動を行うグループに有効であろう。入寮時に受検してもらうことで、チームビルディングなどの研修に活かすことができる。

但し、BEVIの解釈は専門的な知識が必要であり、個人レポートの解釈においても分かりにくいという声も聞かれた。そのため、BEVIのレポートをもとに、BEVIから読み取れることや意味を学生に丁寧に説明し、より深い理解に導くことが重要である。

今回は、このような機会を持つことができなかつたが、寮生を対象にBEVIの結果に基づく自己理解・他者理解を深めるワークショップなどを開くことができれば、より結果を有効に活用でき、さらに寮生の学び・成長につながると考えられる。

5.2 各グループの特徴や多様性を可視化する

BEVIの結果から明らかになった通り、入寮時にBEVIを実施することで、プログラム開始時点のグループの特徴及び複雑性を可視化し、客観的に示すことができる。寮における学び・成長は全人格的なものであり、語学力や知識の有無だけでは測定できない。寮生が学び・成長できるプログラムを提供するためには、入寮時の学生の傾向や特徴を知ることが不可欠である。入寮時点において、寮生がどのような価値観や信念を持っているかを知ることは、寮生活を通して、彼らが何をどのように学び、成長する可能性があるかを知ることでもある。同時に、その年度のプログラムが適切かどうかを判断する基準にもなる。例えば、入寮時に他者への関心が低く、社会やグローバルに対しての関心や意欲も低い学生が多い傾向にある場合は、まずはこれらの意識を高めることからスタートする必要がある。最初の時点でプログラムの見直しに活かすことができるであろう。特にA寮のように1年ごとに寮生が変わる場合は、最初に学生の特徴を知ることがで

できれば、それに合わせて柔軟にプログラムの見直しや改善をすることができ、その年度ごとに適したプログラムを提供することができると考えられる。さらに、寮の運営に携わる担当者が、学生達の特徴や傾向を理解することで、起こりうる問題の予測、気を付けるべきことを認識することができる。

また、今回は、1 回目の BEVI の結果から、RA のスコアが全体的に高く、特に国際教育、多文化教育に求められる「15. Sociocultural Openness」, 「17. Global Resonance」に関しては群を抜いており、RA に関しては国際教育寮のリーダーに求められる学生を一定以上選抜できたと言える。一方、UL に関しては、寮生と変わらない傾向が見られ、育成が必要であることが分かった。このように、選抜に関する評価としても活用することができる。

より良いプログラムを提供し、寮のコミュニティを形成するには、担当者が様々な方法で寮生について知ることが重要であり、BEVI はその一つの方法となり得る。

5.3 客観的効果を測定する

入寮時と退寮時に BEVI を行うことで、寮生の変化や成長を可視化することができる。本調査では、2 回目の受検数が少なく、グループごとの分析ができなかったため、寮全体の傾向を分析した。「Aggregate Profile Contrast」を用いて、より詳細に分析した結果、中位層の学生に大きな変化があったことが示された。また、居住スペースによる分析からは、性別によって変化の傾向が大きく異なっていたことが明らかになった。BEVI では、さらに詳細に分析する場合は、28 項目の背景情報の回答を活用することで（例えば学年別、海外滞在経験別など）、多様な観点から分析を行うことができる。客観的に入寮時と退寮時の変化を知ることで、寮生の成長、寮の問題などを客観的に認識することができる意義は大きい。但し、グルー

プを分けて効果的な分析を行うためには、2回とも同じ学生がテストを受けること、ある程度の受検数が必須である。寮であれば、入寮時と退寮時にBEVIの受検を必須にするなど、制度に組み込む工夫が重要である。

また、国際教育寮は、留学のように渡航を伴うものではないため、全ての変化が国際教育寮の経験に関連しているとは言えない。そのため、変化が起こった要因に関しては、アンケートやインタビュー調査と合わせて検討していく必要がある。今後、入寮時と退寮時の変化とその要因をデータに基づいて可視化することができれば、プログラムの質の改善につながるとともに、国際教育寮の意義と効果を寮生、保護者、大学などに対しても説明することが可能になり、寮の有効性を示すことにも役立つ。

5.4 研修やプログラムの作成・評価・改善に活かす

前述した通り、入寮時点で寮生の特徴を知り、入寮時と退寮時の変化を知ることができれば、当該年度や次年度の寮の研修やプログラム作りに活かすことができる。

A寮では、2020年度のT1とT2の分析により、中位層の学生の多様な社会への関心・関与を示す「17. Global Resonance」が低くなったことが明らかになり、国際教育寮の目標とは異なった結果になったことが分かった。これは、退寮時の結果であったが、次年度も引き続き新型コロナウイルスの影響で、寮に住む留学生数が少ない可能性が高かったため、次年度の寮生全員向けの研修として異文化理解のための研修を実施した。但し、研修のような一時的なものだけでは、大きな変化にはつながりにくいため、実際に体験することも重要である。例えば、来日する予定であった留学生と一定期間オンラインで交流するプログラムを作るなど、留学生がいなくても交流や体験の機会を作ることが大切である。

また、今回、BEVIの尺度をもとに分析を行ったが、グループごとの比較

及び他大学の比較を行ったことで、BEVIの17の尺度の中で、どの尺度を伸ばすことが重要かを認識することができた。基本的には多文化環境においては、ステレオタイプ的な見方、伝統的主義的な見方ではなく、自己、他者、より広い世界にオープンであることが求められる。信念や価値観は簡単に変わるものではないが、国際教育寮では密な共同生活を通して、価値観が揺さぶられる経験をすることが可能な場である。但し、今回の結果からも見られたように、ネガティブな変化につながることもあるため、研修や適切なプログラムを導入するとともに、サポートも必要である。

6. 今後の課題

本研究では、2020年度に実施したBEVIの結果を示し、活用と意義をまとめた。国際教育寮では、BEVIなどを含む客観的効果測定の実用例はまだ少ないが、プログラムの質を高めるためにも、今後活用することが望まれる。

但し、効果的に活用するためには、適切に運用することが重要である。今回はBEVIの受検を任意としたため、2回目の受検率が約30%と低く、比較分析ができないなどの問題があった。入寮時と退寮時にBEVIを受けることで、変化の傾向を見ることができるため、退寮時のデータ収集が課題である。また、グループ全体の理解につなげ、効果的に活用するには、可能な限り多くの寮生が受けることが望ましい。

また、今回、入寮時の寮生の傾向や特徴を把握することが有効であることが示されたが、実施時期が早ければ早いほど、寮内のプログラムや活動に活かすことができ、様々な対策につなげやすい。次回は実施時期、導入方法などを見直し、できるだけ効果的に活用できるような仕組みを作りたい。

今後はBEVIの結果を蓄積するとともに、インタビューやアンケート調査を実施し、BEVIの結果とあわせて、なぜ変化したのか、または変化しなかったのかについて、詳細に分析を行う予定である。それをもとに、寮生

の学び・成長を促す寮の研修及びプログラムを作ることを目指す。

謝 辞

- ・ BEVI のデータを提供して下さり、分析に関する様々なアドバイスを下さった広島大学の西谷元教授に深くお礼を申し上げます。
- ・ 本研究は JSPS 科研費 JP20K14037 の助成を受けたものです。

注

- 1) BEVI の概要については Craig N. Shealy (2015)、西谷 (2020) を参照されたい。
- 2) BEVI の尺度に関する詳細は、Craig N. Shealy (2015) 126-134, BEVI のホームページ「BEVI の尺度」(<https://jp.thebevi.com/about/scales/>) を参照されたい。
- 3) 基本的な開放性、異なる文化、宗教、社会的慣習への受容性、ステレオタイプになる（またはならない）という傾向、自己及び感情の認識など11尺度を利用 (Wandschneider, E. et al. 2015)。
- 4) 本研究で示す他大学（広島大学及びアメリカの大学）の2つの BEVI の結果は西谷元教授（広島大学）の許可を頂き、掲載したものである。

引用文献

- 安部有紀子 (2019) 「米国学寮プログラムにおける学習者中心主義の影響について」『高等教育研究叢書』(広島大学高等教育研究開発センター) 145, 19-36。
- ウィルソン・エイミー、岩野雅子 (2021) 「国際文化学科の人材に求められる行動特性の考察—BEVI-J と COIL の試行を通して」『国際文化学部紀要』27, 67-78。
- 植村友香子、和田健司、田村啓敏、徳田雅明 (2021) 「ブルネイダルサラーム大学との連携による COIL 型 Global Classroom の実施と BEVI テストによる学習効果測定の試み」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』12, 25-38。
- 清藤隆春、橋本智 (2020) 「BEVI を用いたオンライン留学の効果測定—コロナ禍でのグローバル人材育成の試み」『高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報』徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育

推進班 12-21。

- 大学時報 (2018) 「特集 留学 (海外送り出し) に伴う問題への取り組み」『日本私立大学連盟』381。
- 出口朋美, 八島智子 (2008) 「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関学』5, 33-47。
- 永井敦 (2018) 「BEVI によるショート・ビジット型留学プログラムの効果分析—『グローバル人材』は育成できるのか?」『広島大学留学生教育』22, 38-52。
- 中野遼子, 石倉佑季子, 近藤佐知彦 (2020) 「留学交流への COVID-19 の影響—7 月調査の回答を中心に—」『留学交流』9 月号 VOL. 114。
- 中村展洋, 伊藤昭, 今村正治, 小野敏子 (2006) 「立命館アジア太平洋大学における国際学生寮の教育的効果とレジデントアシスタント養成プログラムの開発について」『大学共生研究』1, 139-151。
- 西谷元 (2020) 「BEVI を用いた留学効果の客観的測定—客観的データに基づく留学プログラムの質保証」『高等教育研究叢書』155, 39-52。
- 牧田綾子 (2013) 「グローバル人材育成の場としての『国際寮』」『リクルート カレッジメント』183, 6-11。
- 正宗鈴香 (2015) 「寮生活における留学生の異文化社会適応, 人格形成, 言語習得に関する事例研究—国際寮の教育的機能の可能性—」『麗澤大学』98, 63-72。
- 山川史 (2013) 「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』(異文化間教育学会) 38, 100-115。
- 山川史 (2017) 「大学寮における短期留学生の学び」『異文化間教育』(異文化間教育学会) 45, 93-107。
- 山下香澄, 新留達也, 飯田捷, 田中友章 (2014) 「東京都市圏の国際化推進大学を対象とした留学生寮の研究—留学生宿舎の建築計画と事業形態に関する研究(その1)—」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1081-1082。
- 横田雅弘, 田中共子 (1992) 「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク—居住形態(留学生会館・寮・アパート)による比較—」『学生相談研究』13-1, 1-8。
- 吉田千春 (2016) 「混住寮では何が学ばれているのか—レジデント・アシスタントの語りを中心に—」『国際日本学研究論集』4, 1-15。
- 吉田千春, 田中友章, 飯田捷 (2016) 「混住型学生宿舎の計画と運営に関する研究—スーパーグローバル大学創成支援採択大学の先導的事例を対象として—」『住宅系研究報告会論文集』(日本建築学会) 11, 13-20。
- 吉田千春, 田中友章, 横田雅弘 (2017) 「多文化の学びを育む混住型学生宿舎の研究」『住総研 研究論文集・実践研究報告書』44, 191-202。
- リクルートカレッジメント (2013) 「特集 寮内留学」『リクルートカレッジマネ

ジメント』 183, 4-32。

Shealy, C. N (2015) Making sense of beliefs and values: Theory, research, practice, Springer.

Wandschneider, E., Pysarchik, D. T., Sternberger, L. G., Ma, W., Acheson, K., et al. (2015) "The Forum bEVI project: Applications and implications for international, multicultural, and transformative learning.Frontiers", The Interdisciplinary Journal of Study Abroad, vol.25, 150-228.